

## 開かれた対話としてのウィトゲンシュタイン哲学 ——ベイカーの精神分析モデルの超克

榎野 沙央理

### 要旨

後期ウィトゲンシュタインの哲学的活動を、「治療」概念に着目して明らかにしようとする研究者の一人に、G. ベイカーがいる。ベイカーの解釈の特徴は、精神分析とのアナロジーを用いてウィトゲンシュタイン哲学を捉える点にある。しかし、精神分析とのアナロジーを用いて解釈を行うことに反対する者もいる。この状況は、「治療」概念に着目する研究者にとって、どの程度精神分析とのアナロジーを用いてウィトゲンシュタイン哲学のありようを考えるべきなのかを問うものとなっている。本稿では、この問題に回答するため、ベイカーの精神分析モデルの治療観を検討する。ベイカーの精神分析モデルには問題があり、全てを受け入れることはできない。その問題とは、ベイカーの精神分析モデルがわれわれ（患者）に、ウィトゲンシュタイン（セラピスト）に対する全面的な信頼を要求する構造になってしまっている点である。この点を乗り越えるため、本論文では、開かれた対話モデルの治療観を提示する。開かれた対話モデルは、ウィトゲンシュタインの哲学的活動が彼を信頼する人のみに開かれていることを否定するだけでなく、ウィトゲンシュタインの哲学を自己明晰化として——自身の思索の方向を明確にし、無自覚のうちに自明視していた前提を浮き彫りにする活動として特徴づけるものでもある。筆者は、この開かれた対話モデルの提示によって、精神分析とのアナロジーを用いてウィトゲンシュタイン哲学を捉えることが有益であるという立場を支持したい。

### 1 はじめに

ウィトゲンシュタインは『哲学探究』（以下、『探究』と呼ぶ）において自身の哲学の方法を次のように語る。

哲学には一つの方法ではなく、複数の方法が、いわば、異なった治療法

(Therapien) がある。(PU §133. 圏点強調は原文、以下同様。)<sup>1</sup>

この文は、直前の「諸問題が解決される（諸困難が取り除かれる）のであり、何か一つの問題が解決されるのではない」(PU §133)という文に対応している。ウィトゲンシュタインは、哲学の方法を「治療法」という言葉で喩えているのである。

ウィトゲンシュタイン研究者にとっても、「治療 (therapy)」という言葉はウィトゲンシュタイン哲学のあり方を考えるための一つの指針となっている。特に、S. カヴェル (1962)、C. ダイヤモンド (2004)、そして O. クーセラ (2008) らは、積極的にこの言葉を用いる。しかし、「治療」という言葉に統一的な用法はない。

「治療」ということで何を考えるかは研究者によって異なる。例えば、G.P. ベイカー<sup>2</sup>は、「治療」ということで精神分析とのアナロジーを考える。彼は、『ウィトゲンシュタインの方法——無視されたアスペクト』(2004)において、後期ウィトゲンシュタイン哲学を精神分析のような構造をもつものとして捉える。すなわち、ウィトゲンシュタインの哲学は、精神分析家と患者のやり取りのように営まれ、個々人の思い込みを解消する治療活動であるとベイカーは考えるのである。

このベイカー (2004) の解釈に、P.M.S. ハッカー (2007) は反対する<sup>3</sup>。ハッカーが言うには、ウィトゲンシュタインにとって自身の哲学と精神分析とのアナロジーは、1930年代前半という特定の時期に生じたが、すぐに顧みられなくなった一時的なアイデアでしかない (cf. Hacker 2007, pp. 97-8)。そしてハッカーは、治療という言葉がもつニュアンスを制限しようとする。すなわち、ウィトゲンシュタイン哲学は本来、「われわれの言語についての概念的な言明を誤

<sup>1</sup> 『探究』からの引用には、略号として「PU」を用いる。

<sup>2</sup> G. ベイカーは、P.M.S. ハッカーや H.-J. グロックらとともに、代表的なウィトゲンシュタイン研究者の一人として知られている。特にベイカーは、他のウィトゲンシュタイン研究者とは異なり、ドラスティックな解釈の見直しを行ったことで知られている。ベイカーのパートナーであった K. モリスは、ベイカーの解釈の変遷を、「前期」「中期」「後期」の区別によって説明する。モリスによると、「前期ベイカー」は、後期ウィトゲンシュタインを、『論理哲学論考』の鏡像理論とは全く異なるタイプの意味論の作者とみなしていた。次に、ハッカーとの共同研究によって生まれた「中期ベイカー」は、後期ウィトゲンシュタインが意味論を作ったという解釈を取り下げ、彼を意味と無意味の間の境界を監視する警察官のような存在だとみなした。最後に「後期ベイカー」は、以前の解釈を再び取り下げ、後期ウィトゲンシュタインを、哲学的な悩みを抱えている人に対し新しいアスペクトを見られるよう仕向けるサイコセラピストとみなすという。(cf. Morris 2004, pp. 1-2)

<sup>3</sup> もともとベイカーとハッカーは共同研究者同士で、『探究』のコメンタリー (cf. Baker & Hacker 1980, 1985) を出版する仲だったが、二人は決別した。

解する」(ibid., p.100) ことから生じる「哲学的問題の解決」(ibid., p. 99) を行うものであり、「哲学は、それが当惑した人を——心身の健康と同種の、申し分のない知性の状態に判断力を回復させる限りにおいて、治療的である」(ibid., p.100) と主張する。ハッカーは、治療という言葉がもつニュアンスが部分的にウィトゲンシュタイン哲学のありようと重なっていることは認めるが、精神分析とのアナロジーは認めない。<sup>4</sup>

ベーカーとハッカーの間の対立は、これまで漠然と「治療」という言葉を用いてウィトゲンシュタイン哲学を語ってきた者にとって、どの程度精神分析とのアナロジーを用いてウィトゲンシュタイン哲学のありようを考えるべきなのか、態度表明を迫るものとなっている。

ところが、ベーカーとハッカーの対立からこの問題を検討しようとする議論はこれまでほとんど行われてこなかった。ベーカー (2004) の解釈を肯定する K. モリス (2007) や A. ピヒラー (2007) も、どの程度精神分析とのアナロジーを認めるかについては明言していない。ベーカーのアイディアを批判的に検討し受け継ごうとする研究に O. クーセラ (2014) があるが、クーセラも精神分析とのアナロジーについては言及しない。

本稿では、ベーカー (2004) の解釈を検討し、「どの程度精神分析とのアナロジーを用いてウィトゲンシュタイン哲学のありようを考えるべきなのか」という問いに回答することを目指す。二章では、ベーカーが、中期ウィトゲンシュタインの遺稿と F. ヴァイスマンの考察から着想を得て、彼独自の精神分析モデルによる哲学を展開したことを確認する。三章では、ベーカーの精神分析モデル

<sup>4</sup> ハッカーのベーカーに対する反対について、直接的な検討を行う余裕は本稿にはないが、ハッカーが無自覚的であることを前提にしていることを指摘しておきたい。

ハッカーがベーカーを批判するとき、ハッカーは次のような判断をしていると考えられる。すなわち、仮にウィトゲンシュタインの哲学の手法が精神分析的であることを認めたとしても、あくまで哲学の内容は言葉の意味や言語の規則をめぐる考察であり、両者を混同すべきではない、と。あるいは、ウィトゲンシュタインの哲学の手法を特徴づける「治療」という言葉は、哲学の内容を特徴づけるためには不適切だ、と。つまりハッカーは、ウィトゲンシュタインの哲学の手法と哲学の内容とは独立に成立する、ということを前提にしているように見える。

だがこの前提は、一体どのようなものなのだろうか。哲学の手法がその内容とは独立に生成するという事だろうか。あるいは、哲学の手法のありようを抜きにして哲学の内容だけを考察することができるという意味だろうか。仮にそうだとすると、この前提は正しいのだろうか。

少なくともこの前提は、ハッカーがベーカーの解釈を理解することの妨げになっている。ベーカーの解釈を理解するためには、ウィトゲンシュタインの哲学のスタイルが、それ自体として言葉の意味や言語の規則のあり方をあぶり出すような仕組みになっているという見方を取る必要がある。

ルにおいて重視される患者の「承認」・「同意」概念を取り上げ、ベイカーの精神分析モデルが患者の従順な態度を要請することを示す。そしてこのことが、ベイカーの精神分析モデルにおける対話のあり方を制限的なものにしてしまうことを、四章で指摘する。五章では、ベイカーの精神分析モデルの欠点を乗り越えるものとして、開かれた対話モデルの治療観を提示する。開かれた対話モデルは、ベイカーの基本的なアイデアを引き継ぎつつ、治療相手に従順な態度を要求せず、むしろ様々な態度・反応に応じて対話を形成していく治療活動である。

## 2 ベイカーの着想

晩年のベイカーの論文集『ウィトゲンシュタインの方法——無視されたアスペクト』（2004）には、「精神分析とのアナロジー」という章に三つの論文——「考えること」について考える‘われわれの’方法」（2004a）・「哲学のヴィジョン」（2004b）・「ウィトゲンシュタインの方法と精神分析」（2004c）が所収されている。これらの論文においてベイカーは、「セラピスト」「患者」という表現を用いた独自の精神分析的な哲学観を展開した。

ベイカーの着想は、中期のウィトゲンシュタインから得たものである。中期ウィトゲンシュタインは、自身の哲学とフロイト的な精神分析との類比を見ていた。

もっとも重要な仕事の一つは、読者が「そうだ、正確にそれが私の意味したことだ」と言うくらい特徴的に、すべての誤った思考経過を表現することである。すべての誤りの人相をスケッチすること。

実際われわれは、他者が、この表現を（本当に）自分の感覚の正しい表現として認める場合のみ、その人の誤りを証明できるのである。

すなわち、この人がその表現をそのようなものとして認める場合のみ、その表現は正しい表現である。（精神分析。）

他者が認めるものは、その人の思考の源泉として私が提供するアナロジーである。（BT 410. 下線強調は引用者、以下同様。）<sup>5</sup>

ウィトゲンシュタインはここで、「読者」すなわち相手の思考経過を浮き彫りに

<sup>5</sup> 『ビッグ・タイプスクリプト』からの引用には、略号として「BT」を用いる。

してみせることで、その人に自身の思考のありようを吟味する機会を提供することを、精神分析に似た哲学的活動と考えている。

またベイカーは、中期・後期ウィトゲンシュタインの哲学観の形成に寄与したと考えられているヴァイスマンの考えにも着目する。

哲学の特徴とは、新しく多様な物事の見方を獲得するために、伝統と慣習の死せる皮を突き破ることであり、引き継がれた先入見にわれわれを拘束する足枷を破壊することである。 (Waismann 1968, p. 32)

ヴァイスマンは、論文「私はいかに哲学を見るか」(1968)において、哲学の伝統から生まれた先入見からわれわれを解放することが哲学の特徴だと宣言した。

このヴァイスマンの哲学観を、ベイカーは次のように捉える。

サイコセラピストは、患者が自身の抑圧する動機や感情に気づき、それらを受け入れそれらの起源を探るように、患者を促す。[…]

ヴァイスマンの見解では、哲学者はこれに似た戦略を追求し、無意識的に患者の思考を方向づける先入見・ドグマ・アナロジー・像に患者が気づくよう促すのだという。 (Baker 2004a, p. 154)

ヴァイスマン(1968)自身は、「フロイト」「精神分析」「患者」といった精神分析的な用語を用いておらず、自身の哲学と精神分析とを比較する意図はほとんど持っていなかったと考えられる。ヴァイスマンの哲学観と精神分析との類似性を見る視点はベイカー自身のものであり、ヴァイスマンの見解として述べられていることは、ベイカー自身の考えにも等しい。

ベイカーの中で、中期ウィトゲンシュタインの哲学観と、ヴァイスマンの哲学観とはほとんど同じものだとみなされている。両者を結びつけるものは、精神分析との類似性を見る視点に他ならない。つまりベイカーにとって、ウィトゲンシュタインやヴァイスマンが示唆する哲学者の仕事は、患者——具体的には読者や対話者に対して、その人の思考のあり方を左右するものを見方を気づかせるよう努力することにある。これをベイカーの「精神分析モデル」(Baker 2004a, p. 163)の哲学観と呼ぶことにしよう。

また、ベイカーにとって精神分析モデルは、ウィトゲンシュタインやヴァイスマンの意思を引き継ぐものであるだけでなく、解釈的研究の範囲を超えて、

ベイカー自身が積極的に一般の哲学者に対して、「われわれの方法」として提示しようとするものでもある。つまりわれわれは、精神分析モデルにおける哲学者の側に自分を当てはめて考えてみたり、患者の側に自分を当てはめて考えてみたりすることで、その方法を体得することが期待されている。

それでは、ベイカーはわれわれにどんな方法を提示するのだろうか。先に挙げた「精神分析とのアナロジー」をめぐる三論文では、この哲学観を実現する具体的なメソッドが紹介されている。精神分析モデルは、哲学者に以下のような能力を求める。

良い哲学者の活動は、高い想像力と創造性を現す。彼は、患者の一連の思考に対する感受性と共感というかたちの想像力を必要とする。混乱のルーツをたどり、誤解のもつれをほどく際に、機械的に従うべき秘訣は存在しない。これは、無意識的に患者の思考を方向づけていたアナロジーや像を、患者が認めるように仕向けることがゴールである限り、明らかであるように見える。異なるかたちの想像力は、説得力のあるアナロジーを構成すること、新しいアスペクトを可視化するため比較の対象を考案すること、中間的なケースや新たな表記法を考え出すこと、あるいは、無視された可能性を可視化することにおいて必要とされる。他人に、その人にとって常習となり深く思考の中に根を下ろしている方法とは異なった仕方でものを見させることは、もっとも多大な困難と繊細さのいる仕事である。(Baker 2004a, p. 149)

ここでベイカーは、哲学者に必要な能力を二つ挙げている。一つは、他者の思考に対し価値評価をせずにそれを一旦は理解する能力である。もう一つは、無自覚的なものを見方をあぶり出すために様々な「比較の対象」を考案する能力である。

精神分析モデルでは、患者は自身のもの見方に気づいていないため、患者自身でそれを把握するための比較対象——いわばヒントが必要となる。そのヒントとは、ウィトゲンシュタインが提示したものの中から例を挙げるならば、アウグスティヌス言語観とプリミティブな言語とのアナロジー (cf. PU §§1-5)、「言葉を理解する」ことをめぐる一連のアスペクトを可視化するために役立つ「文を読む」ことの検討 (cf. PU §§156-171)、『論理哲学論考』における「対象」概念と日常的な言語使用における「対象」という言葉の中間的なケースとして

提示された「メートル原器」(PU §50) の概念などが考えられる。

こうしたヒントは、人が一つの見方にこだわっているとき、他のどんな可能性を無視してしまっているかを思い出させ、様々な視点でものを見ることを助けるものとなる。

このようにベイカーの精神分析モデルは、哲学者が、患者の思考を一旦受け止め、患者が自身の無意識的なもの見方に気づくために役立つヒントを考案することを求める。ここで哲学者は、治療をリードする存在であり中心的な役割を果たす者である。これに対し患者の役割は、どちらかと言えば受動的である。だが患者の側にも、ある重要な役割があてがわれている。その役割とは、治療に対する自発的な態度である。この点を次章で検討しよう。

### 3 患者の「承認」・「同意」

ベイカーは、精神分析モデルを展開する中で、繰り返し患者自身の態度について言及する。

この [自分自身の考え方や話し方についてのより良い] 理解の内実は、個人の承認 (acknowledgement) や同意 (consent) によって決まる。私が明確には述べてこずに従ってきた文法規則にとって基準とは、私が明確にし始めることによって、今それを規則として自分で認めることなのである。  
(Baker 2004a, p. 148)

精神分析との一つの明白なつながりであるのは、[われわれの自由な思考を制限する] 像やアナロジーの力が破壊されることが、それらを意識にさらして承認することによってのみ可能だという考えである。[…] この究明においては原理的に、個人の承認を欠くことはできない。すべてはそれに左右される。[…] (Baker 2004b, p. 185. 太字強調は原文、以下同様。)

ベイカーは、患者の態度が治療活動の成立を根本的に左右すると見なしている。特に、患者が哲学者の提示する比較対象を、自身の見方に気づくためのヒントとして、つまり自身の見方に関係があるものとして受け入れることが重要だと考えている。もし患者が、哲学者の提示する比較対象を自身の見方には関係がないものとして、いわば人ごとのように取り扱おうとすれば、どんなに哲学

者が努力をしても治療活動とはみなせない、とベイカーは考えるだろう。

精神分析モデルにおいて、哲学者は「自己吟味」(Baker 2004b, p. 199) のきっかけを与えることはできても、あくまで患者自身の自由に基づく「承認」や「同意」があつてはじめて治療活動は完成する。それゆえ治療は、「患者の自発的な」態度を必要とする。

ヴァイスマンは、強制的な議論の導入との対比を通じて、患者の自由の尊重に強い強調をおく。[…] 哲学者は自身の患者に対して、患者の自発的な (spontaneous) 同意をもって新しい物事の見方を受け入れるよう、決断させようとしなければならない。それゆえ、「哲学の本質はその自由においてである」(Waismann 1968, p. 21) のである。ここにはどんな哲学的所見においても、全ての人を受け入れなければならないようなものは何もない。(Baker 2004a, p. 149)

ベイカーは、哲学者が患者の自発的な態度を引き起こすよう努力しなければならないと考える。だがこれは、あくまで哲学者の義務であり、患者側の問題ではないようである。ベイカーは、患者が哲学者のヒントを受け入れ、治療を自身の哲学的活動の一部として受け入れるかどうかは、患者自身の「自由な」判断に任されると考えていた。

ヴァイスマンは「私はいかに哲学を見るか」を説明し始める。彼が記述し例示する徹底的に治療的な方法は、唯一の可能な(整合性のある)哲学の方法として表明されるのではまったくない。彼は、これらの方法を受け入れるか拒絶するかについてわれわれ一人一人を完全に自由でいさせようとしたように見える。ここには許可や「証明終わり (QED)」はなく、むしろわれわれは、それらを自身の実践に取り込むか——あるいはそのようにすることを拒絶するかの決定に達しなければならないのである。(Baker 2004a, p. 150: cf. Baker 2004b, p. 192)

このようにベイカーは、患者の自発的な態度や、患者の自由な判断からくる承認や同意が、治療の成立条件だと考えていた。このことは、精神分析モデルの哲学が、本質的に患者個人のより良い「自己理解 (self-knowledge)」(Baker 2004b, p. 200) に資するものであり、それを差し置いて哲学者が患者の思い込み



を断罪するものではない、ということを示すように見える。

しかしながらここで、ある素朴な疑問が浮かんでくる。もし患者が自発的な態度を示さず、哲学者の促しを拒むとしたらどうなるだろうか。考えられる可能性は二つあり、ベイカーの精神分析モデルが成立しないことになるか、あるいは、自発的な態度を示さない人を排除するかのどちらかである。これに対しベイカーは、どちらでもない第三の道を示す。

#### 4 精神分析モデルの制限

ベイカーは、患者が自発的な態度を示さない場合について、直接的な言及をしない。彼は、精神分析モデルの不成立を認めることも、自発的な態度を示さない人への治療を諦めることもしない。その代わりベイカーは、患者が自発的な態度で治療にのぞむことの困難を指摘する。

だが仕事は困難をきわめる。われわれは自身の抵抗と戦う必要がある！そしてわれわれの誤解しようとする欲求と！われわれは、自身の思考の多くの根源を認めたいとは思わない。これは不快なのだ！特に、根底的な像は、非常に粗雑で幼稚であるように見えるだろうから。（われわれはそれらの検閲を遂行しようとするだろう。）加えて、それらはわれわれの思考に深くこびりついているため、われわれは絶えず墮落する危険にさらされているのだ。（Baker 2004b, p. 185）

ベイカーは、自ら患者の立場に立って治療の困難を語っている。ベイカーによると、治療活動には、自分の思考と向き合うことに対するわれわれ自身の心理的抵抗がつきものだという。すなわちわれわれは、自分の思考の根源において自身が自覚していないものを恐れる。というのも根源にある見方は、自分が堂々と宣言するほどには洗練されておらず、安易なものに見えるだろうから、と。

ここでベイカーが暗に期待していることは、患者が自身の心理的抵抗に敗れることなく、困難に打ち勝ち、自発的な態度で治療にのぞむことである。つまりベイカーの精神分析モデルにとって、患者が自発的な態度を示すまでの過程は、乗り越えられるべき過程となる。もしこの過程が乗り越えられ、患者が自発的な態度を示し、哲学者のヒントを自身に関係あるものとして承認し同意す

るならば、治療が十分に成立することになる。

ベーカーは、あくまで患者が心理的抵抗に打ち勝つことを期待し、精神分析モデルの不成立も、自発的な態度を示そうとしない人の排除も、どちらも避けようとする。これが第三の道である。だがベーカーが選んだ道は、それほど精神分析モデルを魅力的にしないように見える。今われわれは、患者の立場になって考えてみよう。もし最終的に患者の自発的な態度がなければ治療が十分に成立しないとすれば、結局のところわれわれ患者は、哲学者の促しに同意することを強いられているようなものではないだろうか。ベーカーはあくまで強制ではないと言うけれども、精神分析モデルが許容するのは患者の自発的な態度に限られる以上、われわれは自発的に治療に取り組むことを強要されているにも等しいのではないか。ここに患者の自由など本当にあるのだろうか？

患者の自発的な態度や、哲学者の促しに対する承認や同意を、治療の成立にとって欠かせないものと見なす精神分析モデルは、患者の自由を束縛し、治療における対話のあり方を制限してしまう。だが、ごく自然に考えれば、患者の反応には様々なもの——当惑・狼狽・反抗などがあるはずである。患者の様々な反応に対し、柔軟に応じる対話で治療が営まれてよいはずである。

われわれは、患者の承認や同意を前提とせず成立する治療のあり方を検討していかなければならない。われわれの試みを助けてくれるのは、『探究』においてウィトゲンシュタインが展開した治療活動である。『探究』のウィトゲンシュタインは、患者の態度を矯正しようとせず、治療を遂行している。

## 5 『探究』における開かれた対話

本章では、ウィトゲンシュタインと対話者とのやり取りの一部を紹介したい。これから取り上げる個所は、いわゆる規則遵守論として知られる『探究』§§185-242の一部である。ここで対話者は、『+n』という命令に正しく従うためには、すなわち命令にこたえて数列「1004, 1008, 1012, ...」と書くのではなく「1002, 1004, 1006, ...」と書くためには、何かが必要であるはずであり、その何かを示さなければならないと考えている。これに対するウィトゲンシュタインの態度は、対話者が自身の発言をより良く理解するためのヒントを提示し、対話者に、自身が問題だと思っていることに立ち返る契機を与えようとするものとなっている。

次の節で、ウィトゲンシュタインは対話者に語りかける。

私としてはまずこう言っておきたい。君の考えは、命令をああいう風に思念すること (Meinen) がああいう移行をすべてそれなりの仕方で行ってしまう、ということだったと。君の魂は、思念することによって、いわば先に飛んでいき、君の体がそこやあそこに到着する前に、すべての移行を行ってしまうわけだ。

だから君としては、「その移行はもともと、僕が書いたり、口で言ったり、頭の中で考えたりする前に、すでにやられていたのです」と表現したくなかったわけだ。そして移行は、比類のないやり方であらかじめ決定されており、予見されているように見えた。——思念することだけが現実を予見できるかのように見えたのだ。(PU §188)

ウィトゲンシュタインはここで、「思念すること」という概念を提示する。この概念は、あたかも、魂の働きが『+n』を実際に展開したときの一つ一つの項を決定するように見える、という考えを示すものである。この概念が示す考えは、一見すると突拍子もない作り話に見えるが、ここでは、対話者が自身のものの見方を捉えなおすために役立つヒントとして提供されている。

これに対し、対話者は次のように反応する。

「しかし、すると移行は、代数式によって決定されているわけじゃないわけですか？」[…](PU §189)

対話者の反応は、ウィトゲンシュタインが提示した「思念すること」の概念に直接的な関係がないように見える。少なくとも対話者は、ウィトゲンシュタインが提示したヒントを、自身のものの見方を捉えなおすために役立つものとは認めていない。むしろ対話者は、ウィトゲンシュタインが「ある数列の個々の項の移行を一概に決定する何物かなど存在しない」という積極的主張をしているかのように受け止めている。

こうした対話者の反応は、ベイカーが指摘するような、自身の思考の根源を隠す「検閲」(Baker 2004b, p. 185)の働きかもしれない。そしてベイカーであれば、ここで対話者に自己の抵抗心を乗り越えるよう訴えるであろう。ところがウィトゲンシュタインは、対話者の態度には取り立てて言及せず、直ちに対話者の発言の吟味に取り掛かる。

「しかし、すると移行は、代数式によって決定されているわけじゃないわけですか？」——その質問にはまちがいがある。

私たちは、「移行は、……という式によって決定されている」という表現を使う。この表現はどのように使われているのか？——例えば、こんな風に言うことができる。 $y=x^2$ という式の使い方を教育（訓練）すれば、みんなが  $x$  に同じ数を代入したとき、いつも  $y$  の値が同じとなる計算をするようになる、とすることができる。また、こんな風に言うこともできる。「この人たちは『+3』と命令されると、全員が同じ段階で同じ移行をするように教育されている。」私たちはこのことを、こんな風に表現できるかもしれない。『+3』という命令はこの人たちに対して、ある数から次の数への移行を完全に決定している、と。』（+3）と命令されても、どうしていいかわからない他の人たちや、自信満々に、それぞれ別のやり方で反応する他の人たちとは対照的に。）[…](PU §189)

対話者の発言が何を意味するかは、それほどはっきりとしているわけではない。「移行は、……という式によって決定されている」や「移行は、……という式によって決定されていない」という文がどのような場面で用いられるかは、よくわからないからである。これらの文が用いられるひとままとりの環境を構成することが可能か、この文を使って何かするべきことがあるのかは、あらかじめ保証されているわけではない。

そこでウィトゲンシュタインは、「移行は、……という式によって決定されている」という文が用いられそうなひとままとりの環境を構成しようとする。その環境とは、『+3』という命令に対して一律の反応を示すよう訓練された人たちと、そうではない人たちとの対比である。この異なる種類の訓練を受けた人たちの対比のもとで、ある種の訓練を受けた人たちについて記述するために、『+3』という命令はこの人たちに対して、ある数から次の数への移行を完全に決定している」という文を使うことができそうに思える。

またウィトゲンシュタインは、異なる種類の訓練を受けた人たちの対比だけでなく、様々な種類の式の使い方どうしの対比もできるだろうと示唆する。

[…] また他方では、いろんな種類の式を、それからその式に適した、いろんな種類の使い方を（いろんな種類の訓練を）比べてみることもでき

る。その場合、ある種類の式（とそれに適した使い方）を「与えられた  $x$  に対して  $y$  を決定する式」と呼び、別の種類の式を「与えられた  $x$  に対して  $y$  を決定しない式」と呼ぶ。（ $y=x^2$  が最初の種類で、 $y \neq x^2$  が次の種類ということになるだろう。）この時、「……という式は、数  $y$  を決定する」という文は、式の形式について発言していることになる。——すると、「ここに書きつけた式は、 $y$  を決定する」とか、「ここにあるのは、 $y$  を決定する式だ」という文は、——「式  $y=x^2$  は、与えられた  $x$  に対して数  $y$  を決定する」という種類の文から——区別されるべきものとなる。すると、「そこには、 $y$  を決定する式が書かれているの？」という質問は、「そこに書かれているのは、この種類の式なの？ それともあの種類の式なの？」という質問と全く同じことになる。——しかし、「 $y=x^2$  は、与えられた  $x$  に対して数  $y$  を決定する式なの？」という質問ですべきことは、そう簡単にはっきりしているわけではない。この質問は、生徒が「決定する」という単語の使い方を理解しているかどうか、チェックするときに役に立つかもしれない。またこの質問は、あるシステムにおいて  $x$  の 2 乗は一つの値しかないことを証明せよ、という数学の問題であるかもしれない。（PU §189）

ウィトゲンシュタインは、ある種類の式を「与えられた  $x$  に対して  $y$  を決定する式」と呼び、別の種類の式を「与えられた  $x$  に対して  $y$  を決定しない式」と呼ぶ場合を考える。その場合、似たようないくつかの文でも、文の形式についての発言であったり、複数の式の中から一つの式を指す発言であったり、あるいは、生徒が「決定する」という単語の使い方を理解しているかどうかをテストするための発言であったりすることが考えられる。

ウィトゲンシュタインの提案は、対話者に、自身の発言がウィトゲンシュタインの提示する具体的な文のどれかに当てはまるか、もしそうでないとなれば、どのような仕方で自身の発言の意味をはっきりさせることができるのか、考え直すきっかけを与える。このことは同時に、対話者に、自身が問題だと思っていることに立ち返る契機を与える。というのも対話者は、自身の発言の意味をはっきりさせようとするならば、自身が問題だと思っていることに立ち返る必要があるからである。対話者は、「しかし、すると移行は、代数式によって決定されているわけじゃないわけですか？」という発言で自分が何を言いたかったのかをはっきりさせるために、自身が本当に求めていることを意識せざるを得なくなる。そしてそれは、ベイカーが指摘したような、自身の思考の根源に立

ち返ることであり、自身が「こうでなくてはならない」と決めた固定的な視点を自覚することであり、自身の探求の方向性を左右している枠組みを自覚することである。

こうしたウィトゲンシュタインと対話者によるやりとりにおいて、対話者の承認・同意はまったく問題になっていない。だからと言って、両者のやりとりはすれ違いに終わっているわけでもない。ウィトゲンシュタインは、対話者の態度に関わらず、対話者が自身の発言をより良く理解するためのヒントを与えるし、対話者も、ウィトゲンシュタインのヒントに対して自分なりの反応を示している。ウィトゲンシュタインは、対話者なりの反応を、単なる抵抗心の表明として非難するのではなく、対話者のものの見方を反映するものとして受け止め、そこから吟味を始めるのである。

対話者の承認・同意を前提としない治療のあり方は、『探究』の中にある。そこでは、ベイカーの精神分析モデルのように、哲学者が治療をリードし患者がそれにこたえるという構造ではなく、むしろ、対話者の反応に合わせてその都度ウィトゲンシュタインがヒントを与えるという、対話者中心の開放的なあり方をした治療がある。

開放的なあり方をした治療では、一方の意図がもう一方に対して正確に伝わることを絶対的に重要だとは考えない。治療の成立にとって、ウィトゲンシュタインの意図が対話者に正確に伝わることも、その反対も必要不可欠だとは考えない。その代わり、両者がお互いに相手の態度を非難せず、自分の意図から逸れる相手の発言も許容し、その上であくまで自分の伝えたいことを相手に言うことによって、治療が成立する。

この開放的な対話をベースとした治療観は、ベイカーの精神分析モデルの基本的なコンセプト——すなわち治療が、人が無自覚的に固定してしまっている見方を当人に気づかせる哲学的活動である、という考えを引き継ぐ。さらにこの治療観は、ベイカーの精神分析モデルが、患者の自発的な態度や承認・同意を前提することで引き起こす困難から完全に自由である。開放的な対話の治療は、相手の同意を強要せず、お互いの態度の違いを強引に埋めようとせずに営まれる哲学的活動なのである。

## 6 おわりに

これまでわれわれは、ベーカーの精神分析モデルを検討してきた。それは、中期ウィトゲンシュタインとヴァイスマンの見解をもとに構成された哲学の方法である。そこで哲学者はセラピストとして、患者となる相手に、その人が自身の無自覚的なものの見方に気づくことができるようなヒントを与える。そして、患者がそのヒントを自身に関係あるものとして受け止め「承認」「同意」することによって初めて、治療は十分に成立する。治療をリードするのは哲学者であるが、それにこたえる患者の姿勢が精神分析モデルにおいては重視される。

そのためベーカーの精神分析モデルは、患者に自発的な態度を要請する。患者は基本的に自由な判断で治療に参加できるとされているが、自発的な態度以外のあり方が精神分析モデルの中では許容されていない。結果として、哲学者の促しに応じない人は、ベーカーの精神分析モデルには居場所をもつことができず、締め出されることになってしまう。

こうした制限を抱える精神分析モデルを乗り越えるために、本稿はウィトゲンシュタインの『探究』に立ち返り、開かれた対話モデルの治療を構成した。ここでは、患者の「承認」「同意」は治療の成立にとって問題にならない。ウィトゲンシュタインの対話者は決して従順ではないが、ウィトゲンシュタインは対話者の反応に応じてその都度新しいヒントを考案する姿勢で治療を行なっている。

開かれた対話モデルは、ベーカーの精神分析モデルの基本的なコンセプト——治療が、人が無自覚的に固定してしまっている見方を当人に気づかせる哲学的活動である、という考えを引き継ぐ。しかし、相手の「承認」「同意」といった従順な態度は要請しない。

当初の問い「どの程度精神分析とのアナロジーを用いてウィトゲンシュタイン哲学のありようを考えるべきなのか」に対する本稿の回答は次の通りである。ベーカーの精神分析モデルの基本的な考えは、受け入れられるものである。これにより、ウィトゲンシュタイン哲学のありようを考察するためにわれわれが精神分析とのアナロジーを使うことは役に立つ、と結論する。もちろんこの結論は、精神分析とウィトゲンシュタイン哲学とのアナロジーを無際限に認めるわけではない。そうではなく、ウィトゲンシュタイン哲学の見通しをよくするために有用な比較対象が、精神分析とのアナロジーによって立てられる、ということの意味するのである。

## 参考文献

- Baker, G.P. (2004), *Wittgenstein's Method: Neglected Aspects: Essays on Wittgenstein*, Blackwell.
- . (2004a), “ ‘Our’ Method of Thinking about ‘Thinking’ ”, *Wittgenstein's Method: Neglected Aspects: Essays on Wittgenstein*, Blackwell.
- . (2004b), “A Vision of Philosophy”, *Wittgenstein's Method: Neglected Aspects: Essays on Wittgenstein*, Blackwell.
- . (2004c), “Wittgenstein’s Method and Psychoanalysis”, *Wittgenstein's Method: Neglected Aspects: Essays on Wittgenstein*, Blackwell.
- Baker, G.P. & Hacker, P.M.S. (1980), *Wittgenstein: Understanding and Meaning*, Blackwell.
- . (1985), *Wittgenstein: Rules, Grammar, and Necessity*, Blackwell.
- Cavell, S. (1962), “The Availability of Wittgenstein’s Later Philosophy”, *Philosophical Review*, 71(1), pp. 67-93.
- Diamond, C. (2004), “Criss-Cross Philosophy”, *Wittgenstein at Work: Method in the Philosophical Investigations*, ed. by E. Ammereller and E. Fischer, Routledge.
- Hacker, P.M.S. (2007), “Gordon Baker's Late Interpretation of Wittgenstein”, *Wittgenstein and His Interpreters: Essays in Memory of Gordon Baker*, ed. by G. Kahane, E. Kanterian and O. Kuusela, Blackwell.
- Kuusela, O. (2008), *The Struggle Against Dogmatism: Wittgenstein and the Concept of Philosophy*, Harvard University Press.
- . (2014), “Gordon Baker, Wittgensteinian Philosophical Conceptions and Perspicuous Representation: the Possibility of Multidimensional Logical Descriptions”, *Nordic Wittgenstein Review*, Vol. 3 No. 2, pp. 71-98.
- Morris, K. (2007), “Wittgenstein's Method: Ridding People of Philosophical Prejudices”, *Wittgenstein and His Interpreters: Essays in Memory of Gordon Baker*, ed. by G. Kahane, E. Kanterian and O. Kuusela, Blackwell.
- Pichler, A. (2007), “The Interpretation of the Philosophical Investigations: Style, Therapy, Nachlass”, *Wittgenstein and His Interpreters: Essays in Memory of Gordon Baker*, ed. by G. Kahane, E. Kanterian and O. Kuusela, Blackwell.
- Waismann, F. (1968), *How I See Philosophy*, ed. by R. Harre, Palgrave Macmillan UK.



- Wittgenstein, L. (2009) *Philosophische Untersuchungen = Philosophical Investigations*, trans. by G. E. M. Anscombe, P.M.S. Hacker and J. Schulte, Rev. 4th ed., Blackwell. (引用の際は、以下の二つの邦訳を参考にした。丘沢静也訳、『哲学探究』、岩波書店、2013年。藤本隆志訳、『ウィトゲンシュタイン全集 8：哲学探究』、大修館書店、1976年。)
- . (2011), *Tractatus logico-philosophicus*, Suhrkamp.
- . (2013), *The Big Typescript: TS213*, German-English Scholars' Edition, ed. and trans. by C. Grant Luckhardt and Maximilian A. E. Aue, Blackwell.

(まきの さおり／千葉大学大学院人文社会科学部 博士後期課程)